

「今井豊成」と荒神宮

(1) 荒神宮創建の伝承

当データは『諏訪形誌』からのスピニアウトのため、荒神宮の創建について、まず『諏訪形誌』から引用します。

…荒神宮に伝わる『荒神宮の由来』という文書によれば、中原兼遠の子に今井豊成という人物がいて、丸子依田城の義仲拳兵に際して荒神宮に派遣され、武運を祈願したとされています。今井豊成について詳細は不明ですが、今井四郎兼平弟ということになるでしょう。
(『諏訪形誌』 272ページ)



この記述に出てくる『荒神宮の由来』とは、1985（昭和60）年に当時の荒神宮30代別当今井武雄（1898（明治31）年～1995（平成7）年）によって書かれた文書を指すものと思われます。今井武雄は上水内郡中条村（現在の長野市中条地区）出身で、荒神宮の別当に迎えられた人です。『荒神宮の由来』の全文については別途、『諏訪形誌web版』に掲載してありますが、この文書には以下のような記述があり、『諏訪形誌』の記載はこれに依ったものと思われます。

本社創建は不詳であるか、治承四年夏木曾義仲は、高倉宮以仁王の命旨を承り平家追討の義兵を当国依田の里に挙げた時、木曾に住む中三権守中原兼遠は一族を引具してこれに応じて、出陣のときその子今井蔵人に木曾義仲の荒神神像を託して、木曾一門の武運を祈らしめた。

注：この『荒神宮の由来』という文書の中には「第25代別当今井兼春の記す由来記による」という記載がありますが、同じく今井武雄が残した『荒神宮別当今井家系略記』では、25代別当は「今井隼之介」となっており、「今井兼春」という名の「別当」は記載されていません。このように、今井武雄の残した文献には若干の揺らぎがあり、史料としては要注意なのかもしれません。

この文書では「中原兼遠は自分の子に荒神像を託した」とあり、「豊成」の名前は出てきません。また、この文書によると、上の記述は『25代別当今井兼春の示す来歴記』と「木曾家後裔木曾源太郎著による『木曾公旧古（故）実』」による、とされています。

さて、荒神宮30代別当今井武雄による別の文書も存在します。荒神宮は1811（文化8）年の火災で建物や文書などのほとんどを失ってしまったわけですが、その時の第21代別当、今井隼人兼文によって書かれた『荒神宮別当今井家系略記』を、1988（昭和63）年に今井武雄が書き写したとされるものです。この文書も全文が『諏訪形誌web版』に掲載されています。『荒神宮別当今井家系略記』では、荒神宮の創建について、以下のように書かれています。

祖先 今井蔵人豊成
治承四年源義仲依田表出軍に従属したが有故て諏方形方に潜居して●石と伴称す（「●」の文字は判読不能）
後今井に復す今井兼平の二男、中三権頭の孫

この文書には「豊成」の名と今井兼平の二男、中原兼遠（中三権頭）の孫という記載があります。これが21代別当今井隼人兼文によって書かれたとするなら、江戸時代の後半には「荒神宮は今井兼平の子である今井豊成によって創建された」という言い伝えが成立していたことがわかります。ただし、この今井隼人兼文の手によるとされる文書の原本が存在するかどうかについては現在確認中ですが、2023年2月の時点では見つかっていません。



また、この『荒神宮別当今井家系略記』には第21代別当今井隼人兼文没後、30代別当今井武雄に至る荒神宮の歴史が書かれていますが、これは当然、今井武雄の手によるものと思われます。これによると、火災後の荒神宮再建にあたって、関東各地から援助の手がさしのべられたことがわかります。このことは、江戸時代に荒神宮信仰は関東各地（特に群馬県）に広がっていたことを示しているものと思われます。この流れの中で、『諏訪形誌』にも登場する荒神宮参拝に訪れる人たちに宿を提供した「諏訪形の住民が無届けで宿屋業を行って訴えられる（『諏訪形誌』 61ページ）」というようなことにもつながっていくのでしょうか。江戸時代の荒神宮信仰の盛り上がりを示す史料です。

これらによれば「荒神宮を開いた人物（今井豊成）」について、『25代別当今井兼治の示す来歴記』と『木曾公旧古（故）実』では「中原兼遠の子（今井兼平の兄弟）」、『荒神宮別当今井家系略記』では「今井兼平の子（二男）＝中原兼遠の孫」とされています。


(2)「今井豊成」とは誰か

これまでに述べたとおり、荒神宮に関する文書からは、中原兼遠の子、または孫にあたる「今井豊成」という人物が荒神宮を創設し、以後代々「今井家が別当をつとめてきている」ということとなります。今井武雄の残した文書では、現在（2022年）の別当今井貴美は、今井豊成から数えて32代目の別当ということとなります。ただ、いろいろな資料をあたって「今井豊成」という人物が見当たりません。

前述のとおり、『荒神宮の由来』では「今井豊成は中原兼遠の子」とされています。中原兼遠の子どもたちについて調べてみると、概ね次のようになります。

中原兼遠の子孫

右は今井兼平像（德音寺蔵 『源平合戦人物伝』より引用）




```

    graph TD
      A[海野行親] --- B[中三権頭  
中原兼遠]
      B --- C[千鶴御前]
      C --- D[中原太郎兼秀（早逝）]
      C --- E[樋口次郎兼光（木曾四天王）]
      C --- F[中原三郎兼好]
      C --- G[今井四郎兼平（木曾四天王）]
      C --- H[落合五郎兼行 —— （五男）古畑矢弥右衛門  
（菅平に住んだ）]
    
```

中原兼遠の子どもたちの中で、「巴御前」という女性も有名です。各地に彼女に関わる伝説や墓所などがあり、荒神宮にも「木曾義仲没後に荒神宮を訪れた『諏訪形誌272ページ』とされています。また『諏訪形誌』の記述にもあるとおり、富士山には巴御前の五輪塔もあります（『諏訪形誌47ページ』）。

その後巴御前は落ちのび、後に和田義盛に嫁いで、義盛の子義秀を産んだという話も伝わっています（『源平盛衰記』による）。しかし、和田（朝比奈）義秀の生まれたのは1176年で、木曾義仲が栗津の戦いで没した1184年よりも前であるため、事実としては疑わしいものと思われる。

巴御前の存在そのものは『吾妻鏡』などでは確認できず、当時の書状や日記の中にも登場しないようです。『平家物語』や『源平盛衰記』で語られているだけということから、御前の存在そのものもやや疑問ではあります。



巴御前像 メトロポリタン美術館蔵

『荒神宮別当今井家系略記』では「今井豊成は今井兼平の二男」とされています。今井兼平の子どもたちについてわかっていることは以下のとおりです。

今井兼平の子孫

長男 今井兼連…北佐久郡立科町芦田の「与惣塚」が兼連の墓所とされていますが、異説もあるようです。

次男 今井兼之…現在の群馬県渋川市に落ちのびたとされています。次のような資料参照があり、この記述内容は後述の「群馬地域学研究所の手島仁さんからの情報」とも整合性があるように思われます。

元暦元年（1184年）の栗津の戦いで木曾義仲と今井兼平が戦死すると、兼平の次男今井兼之・高梨・楯・根井・町田・小野沢・萩原・串洲・諸田等が義仲の三男木曾義基を匿い、群馬県渋川市北橋村箱田に落ち延びたという話も伝わっています。ただし、木曾義基の存在については疑義もあるようです。また、「木曾義基は木曾義仲と巴御前の間の子」という話が『岐蘇古今沿革志（1890（明治23）年 武居正次郎著）』に出てきますが、かなり怪しい説というのが通説のようです。

これらの義仲に関わりのある人たちが、義仲の崇敬社である岡田神社、沙田神社、阿禮神社の分霊を勧請し木曾三社神社・木曾三柱神社を創建、箱田に住居を構え、後に箱田城を自ら築城し、箱田地衆（国衆）として活動しました。また、戦国時代に入ると有力大名である白井長尾家、上杉氏、武田氏、北条氏、酒井氏、松平氏に仕えました。（出典：Wikipediaなど）

群馬地域学研究所の手島仁さんからの情報

…諏訪形誌を拝見し、今井四郎兼平が出てきました。一族のものは群馬県へ落ち延び、前橋市に隣接する旧北橋村下箱田（渋川市）に土着しました。同地に今井一族が住んでおり、本家、木曾神社、醸造業などを営んでいます。群馬県内の今井姓はその末裔であると言われていました。…
(『諏訪形誌 web版』のアドレスに届いたメール)

三男 幼少名・熊丸…長野市鬼無里山角の山角城を築城。

『諏訪形誌』からの引用

兼平には三人の子どもが確認できています。長男、兼連の墓所は立科町芦田にあります。長野市御厨（長野市今井地籍の東隣の地区）にある今井山譚楽寺は次男兼之によって創建されました。また、三男の幼名熊丸は長野市鬼無里の山角城を築城したと伝えられています。

文献によると、義仲と兼平の死後、今井兼之（兼平の次男）らが巴御前と義仲の三男義基を匿って群馬県渋川市箱田に落ちのびたとされています。ただ、巴らが落ちのびた先は北陸地方である、という説もあるようです。また、巴の供養塔と伝えられている「五輪塔」が上田市富士山に建てられていることについては、『諏訪形誌』46ページでご紹介させていただいたとおりです。

以上から考えると、「豊成は中原兼遠の子、または今井兼平の子」と考えるのはやや無理がありそうです。しかしながら、婚姻制度が現在と大きく異なる時代のことから、兼遠または兼平の正妻以外の女性との間の子ともという可能性もあるだろうと思いますが、これまでに調べた範囲では「今井豊成」という人物は全く霧の中です。情報をお持ちの方がおられましたら教えていただけたら幸いです。

(3) 現時点での結論として…

以上のデータ等から、『諏訪形誌』の記述にあるとおり、「中原兼遠の子に今井豊成という人物がいて、丸子依田城の義仲挙兵に際して荒神宮に派遣され、武運を祈願したとされています。」の「とされています」という記述が妥当なのではないかと思われる。「中原兼遠の子」または「今井兼平の子」という説については伝説の域を出ないものではないか、しかし、縁起として江戸時代の後期には「今井兼平につなら利がある今井豊成という人物によって創建された」という話が語られていた、というあたりが妥当な見方ではないかと考えますが、いかがでしょうか？

【コラム】荒神宮にある「今井四郎兼平古蹟」の碑について

荒神宮と中原兼遠、今井兼平を関連づけるものとして、荒神宮に「今井四郎兼平古蹟」の碑があります。この石碑は建立年は不明ですが、福島安正（松本市出身 陸軍大将 1852（嘉永5）年～1919（大正8）年）が揮毫したものなので、大正時代に建てられたものと考えられます。この年代は第30代今井武雄が荒神宮の別当を務めていた時期でもあり、武雄と筧克彦（諏訪市出身 憲法学者・神道思想家 1872（明治5）年～1961（昭和36）年）や旧日本軍関係者などとの関連から建立されたものなのではないかと推察できます。いずれにしても、この石碑の存在によって荒神宮と今井兼平との関係性を論じることは若干無理があるように思います。なお、荒神宮には筧克彦が揮毫した「参上神社」の掛け軸が残っており、荒神宮が「参上神社」と称するいわれや、今井武雄と筧克彦のつながりを示すものと思われる。



荒神宮にある「今井四郎兼平古蹟」の碑

【コラム】今井兼平同族会

最期まで木曾義仲を守って奮戦した今井兼平の墓は、JR石山駅に近い盛越（もりこし）川のほとりの木立の中にあります。小公園のような墓所には、栗津史跡顕彰会の碑や改修記念碑とともに、孫によって建てられた鎮魂碑、顕彰碑、灯籠や献花筒などが数多く建ち並んでいます。

今年一月、兼平から三十五代目の子孫にあたる今井六郎さん（八六）長野県岡谷市ら全国の百三十人で行く「今井兼平同族会」が、兼平の忠節をたたえる「表忠文」を墓の隣に復刻した。六郎さんの妻密子さん（八五）は「古典にも立派に描かれている兼平は『知る人ぞ知る』存在。本多氏ら滋賀の方々がつくってくれたご縁を大切に、今後も地味にお守りしていきたい」と話す。

『京都新聞』ふるさと昔語りより抜粋（2006年11月28日掲載）